



それはいつも
突然やってくる

…えっ

いざい



数日に一度
自分が
深澤真凜ではなく

石井勇斗
だったことを
完全に思い出す

…裸…!?
そうだ
お風呂に入ろうと
してて…

…また
心まで深澤さん
になってたんだ…



ねえ
私の前で
お尻を
見せてよ

僕は…
また保科さんに
酷いことを…



…こんな
はずじゃ
なかったのに



…あの時
僕は興奮
していた…?



助けるために
あのクスリを
使ったのに

僕が保科さんを
いじめるなんて…



保科さん…
ごめんツン…

あっ

あっ

はあ
はあ

んっ

はあ
あっ

ガク
クキョ

ごめん
ごめん

激しい
罪悪感…

…だけど
それ以上に
いつも抗えずに
いる



ふう

あっ

……
こんなこと
やめなきゃ

はあ

あっ

今度こそ
自分を
取り戻すんだ

あっ

保科さんを
守るんだ……

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ



快感で
頭の中が
溶けて
しまいそう……

はは

あはっ



まるで小動物の
ように怯え
従順に僕に従う
保科さん

そんな彼女の
姿を思い出すと――



好き……
保科さん

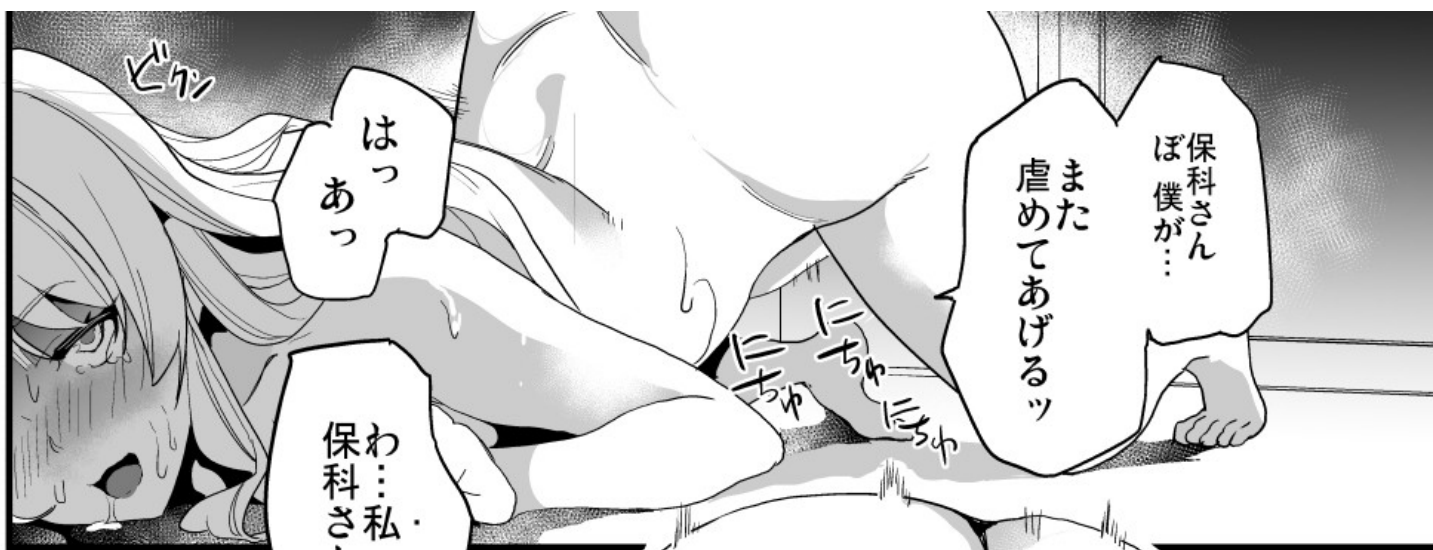
はあ

はあ

はあ

だ……大丈夫
ちゃんと
僕のままで……

あっ

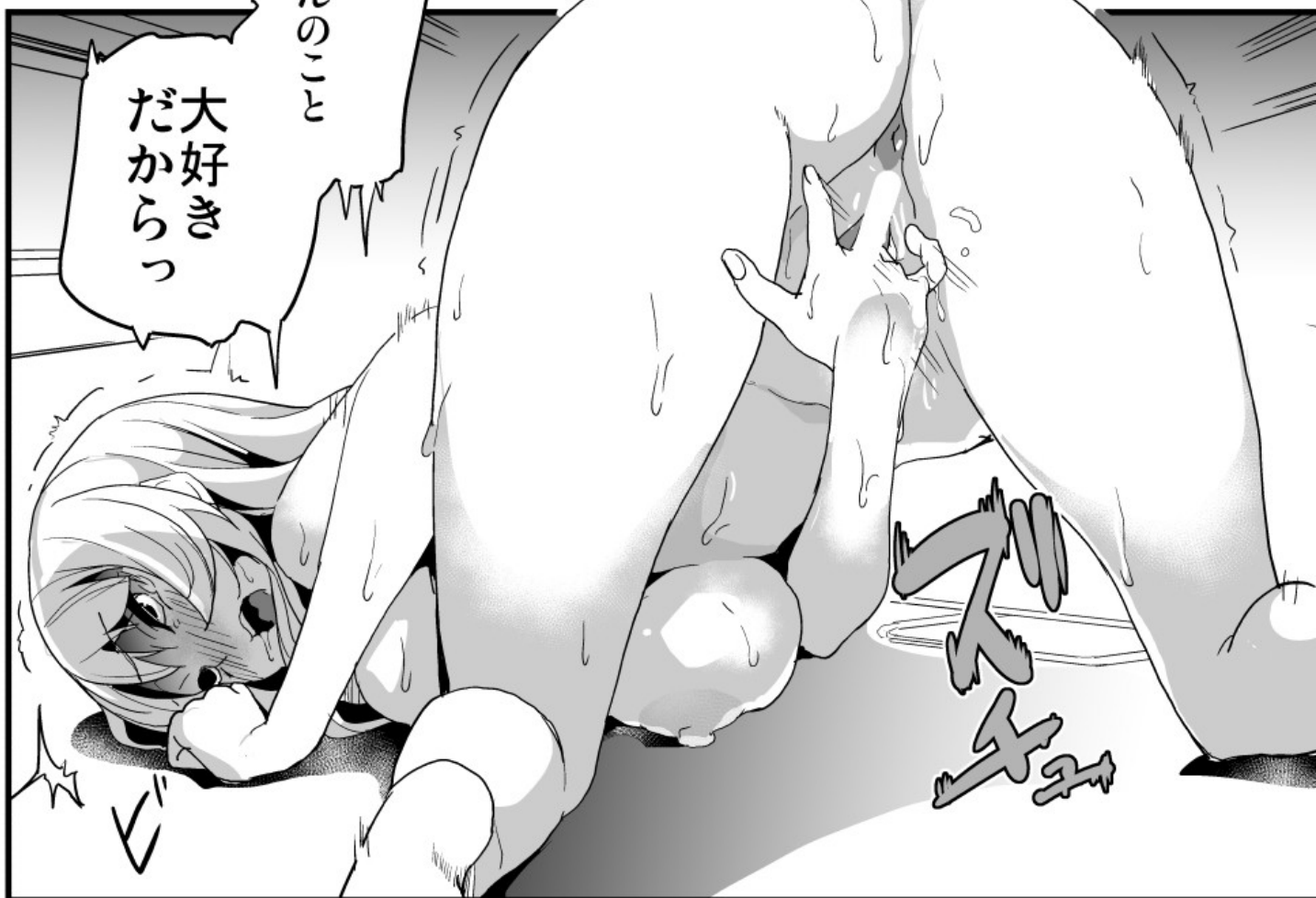


はっ
あっ

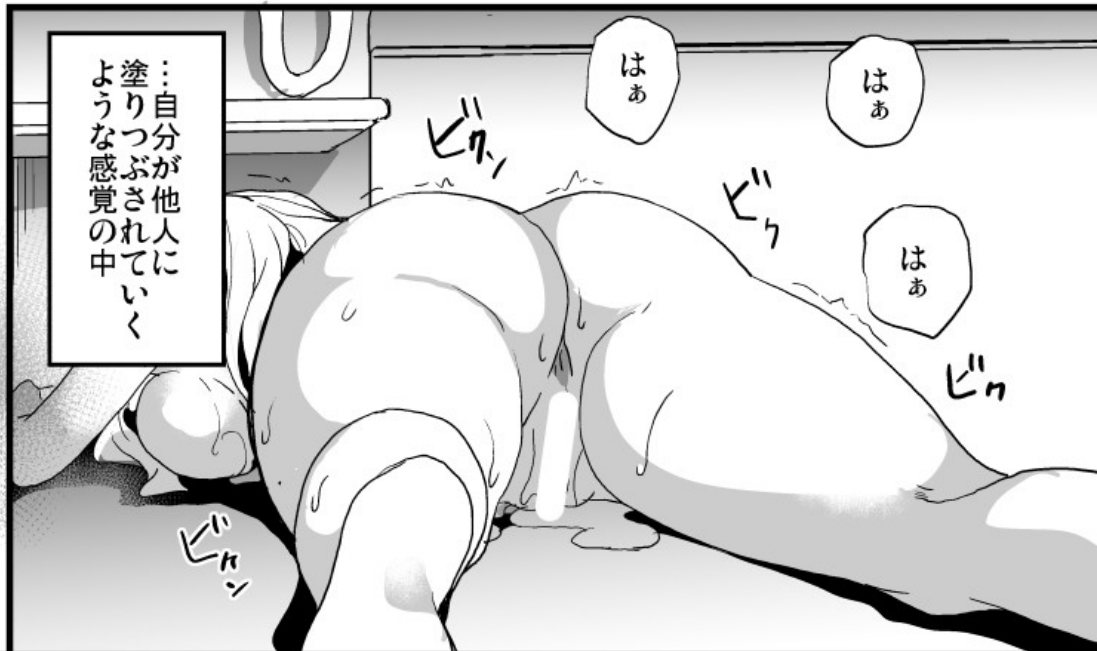
保科さん
ぼ僕が…
また
虐めてあげるッ

わ…私
保科さんのこと

大好き
だからっ



私は気を失った



…自分が他人に
塗りつぶされていく
ような感覚の中

はあ
はあ
はあ